

## 舌診入門 ⑥

# 舌苔の性状と薬方

三谷 和男 京都府立医科大学東洋医学講座

舌苔の性状は、潤・燥・厚・薄・浄・膩・垢・滑・剥などの区別があります。正常な苔は、やや湿潤した状態ですが、湿潤の程度が強いと、舌面に半透明ないし透明の層ができ、これを滑苔(写真1)といいます。水分代謝としての湿痰・痰飲のあることを意味します。利尿剤としての木通・車前子・茯苓・白朮・沢瀉・滑石などを適宜用いることになります。

消化機能が低下し、これに水分代謝異常が加わると、苔は粘性の高い膩滑苔(写真2)になります。平胃散・藿香正気散・胃苓湯・二陳湯などを用います。舌苔が乾燥している場合が燥で、熱性疾患による一種の脱水状態と理解しますが、輪液とともに緩下剤の適応証にもなります。

舌苔の厚薄は、糸状乳頭の発育と関連しますが、漢方的には、邪盛であれば苔は厚く、邪衰では苔は薄く、糸状乳頭の1本1本がはっきりと認められます。これを「浄」(写真3)と呼んでいます。こうした顆粒状が不明瞭となり、粘性が強くなった苔を「膩」と呼び、さらに不潔な物質で覆われたような苔を「垢膩」(写真4)または「濁膩」といいます。また、厚いが、粘性がなく、おからをふりかけたような苔を「腐」といいます。この場合は、消化管の炎症所見と考えています。したがって黄連湯・黄芩湯・逍遙散・四逆散・柴胡湯などが与えられます。

舌苔のすべてが剥落しないで、一部分のみが脱落し、光滑で無苔になった状態を「剥」(写真5)といいます。地図状舌に近いものですが、症状は複雑です。一般に胃気の低下を意味します。しかし、舌質の色調や、残っている苔の状態によって虚実を判断する必要があります。

苔の色調は、白苔・黄苔・黒苔に分けて考えます。

薄白苔(写真6)は表証として、疾病の始まりであり、一般に下剤は禁忌です。ただし、乾燥して亀裂を生じている場合には、調胃承気湯などで下します。白苔が厚く、膩苔(写真7)であれば寒湿・痰飲として平胃散・二陳湯・半夏瀉心湯を考えますが、顆粒状であれば、小柴胡湯・梔子鼓湯・黄連湯などが適応です。

黄苔(写真8)は、一般に熱証と考えられています。つまり薄白苔の表証から、疾病が裏に入った状態で、この場合、苔は顆粒状で、軽度に湿潤していますが、膩苔ではありません。清熱剤が必要で、白虎湯・瀉心湯・大柴胡湯などが考えられます。黄腐苔(写真9)になり、乾燥している場合は「裏実」として承気湯・大黃附子湯などを注意深く与えます。粘性の黄膩苔(写真10)であれば、「湿熱」として清熱剤および理気剤の組合せを考えます。例えば黄連解毒湯合橘皮枳実生姜湯、あるいは三黄瀉心湯合茯苓杏仁甘草湯などです。竜胆瀉肝湯もよいでしょう。

黒苔(写真11~13)は、抗生物質服薬後の真菌の増殖、口腔内の少量の出血によって鉄分が舌苔に吸収されるため、などと説明されていますが、黄苔の色調とともにその色調の原因については不明のことが多いようです。黒苔は、一般に病邪が盛んであり、速やかに適切な治療が要求されます。黒苔が乾燥して亀裂があり、舌質が紅色なら、白虎湯(加人参湯)・瀉心湯が必要です。しかし、厚膩で湿潤しているようであれば、腎虚・脾胃の虚と考え、生脈散・人参湯の適応となります。また、灰黒色を呈し、滑・潤であれば、茯苓四逆湯・四逆湯などの附子剤の主治するところとなります。

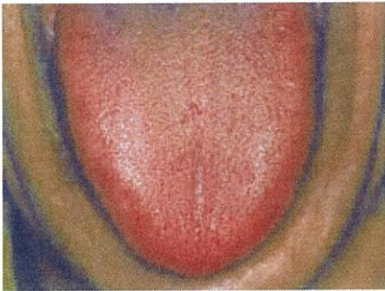


写真1 滑苔



写真2 膩滑苔

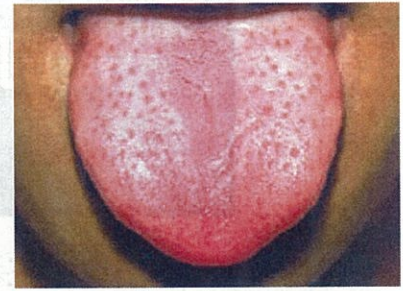


写真3 浄苔

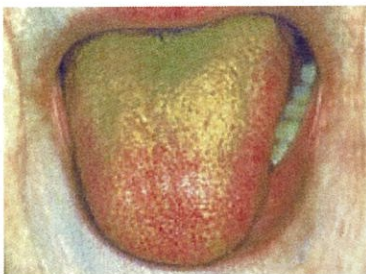


写真4 垢膩苔

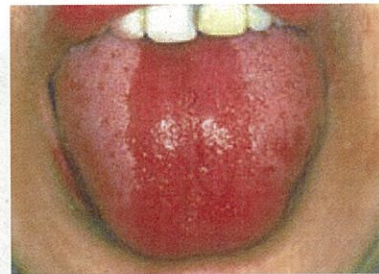


写真5 剥苔

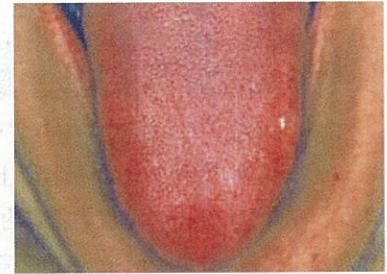


写真6 薄白苔



写真7 白膩苔

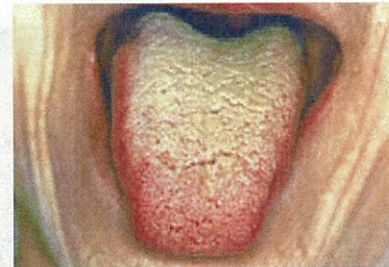


写真8 黄苔



写真9 黄腐苔

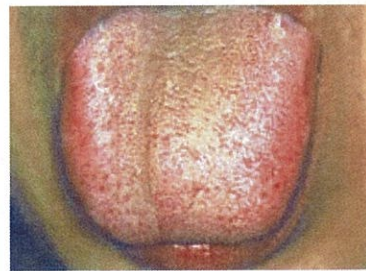


写真10 黄膩苔



写真11 黑苔

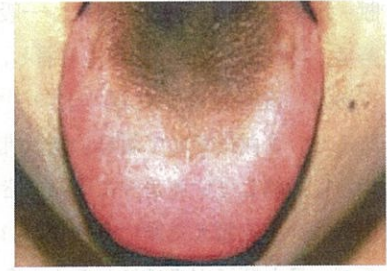


写真12 黑苔

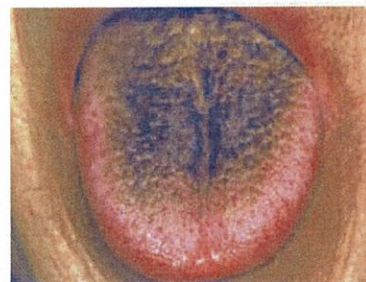


写真13 黑苔